



ダビッチを治療の選択肢の1つとして、 総合的によりよい治療を

村上医師：手術支援ロボットは治療の選択肢の1つで、これまでの開腹手術や腹腔鏡手術の積み重ねの上にあります。前立腺がんを開腹手術する病院はほとんどなくなり、ロボット支援手術で治療する施設で行うようになってきました。胃や肝臓、膵臓など、ほとんどの臓器でロボット支援手術に保険が通りつつあります。規定されている症例数など、ダビッチを使用できる施設基準が広がると、さらに活用が進むでしょう。当院ではダビッチを使う手術に約10年の経験があり、術者のスキルや病院での運用システムの実績があります。私たちはこれまでの経験を活かして、さらに貢献していきたいと思っています。

田医師：当院では早くからダビッチを導入し使用してきたため、スタッフも扱いに慣れています。どの症例にロボットを使うかは、多くの施設で適応が決まっています。腹腔鏡とダビッチでどちらが早く手術を受けられるか、手術枠が関係する場合もあるでしょう。当院は患者さんの手術があまり先にならないように、臨機応変に対応しています。当院の特徴は、ダビッチを使った治療に限らず、患者さんが来院されてから手術までの待機が短い点です。また、院内連携がスムーズであることから合併症を持つ患者さんの診療にも長けているといえます。総合的に判断して早くて確かな治療ができるように力を尽くしますので、ぜひご紹介ください。



地域の先生方へのお知らせ

INFORMATION

第2回医療連携に関するアンケート

地域医療機関との連携強化、サービスの改善に役立てるため、
ぜひご意見、ご要望をお聞かせください。
回答はコチラのQRコードからお願いします。



回答期限

7/31(月)まで

※紙での回答をご希望の方は、お手数ですが、医療連携課までお問い合わせください。

紹介患者さんのお問い合わせ・ご予約は医療連携課で承ります。



横浜市立みなと赤十字病院

〒231-8682 横浜市中区新山下3丁目12番1号

医療連携課

電話 045-628-6365(直通)
FAX 045-628-6367(直通FAX)
受付時間 平日 8:30~17:00



みなとからの風 No.52

医療連携センターだより

発行：2024年6月



ダビッチによる低侵襲治療を实践

泌尿器科部長

村上 貴之

Takayuki Murakami

大腸外科副部長

田 鍾寛

Kanechika Den



日本赤十字社 横浜市立みなと赤十字病院
Japanese Red Cross Society



Special Interview

ダビンチを「治療の選択肢の1つ」として 使いこなし、総合的によりよい治療を



当院では新しい第4世代のダビンチXiを取り入れ、 さらに使いやすくなりました。(2023年12月導入)

早い時期にロボット支援手術を導入、 泌尿器科や外科などで使用

村上医師：日本では2012年に初めて、ロボット支援手術(ダビンチ)が前立腺がんの術式で保険収載されました。当初、ダビンチを使うのはほぼ泌尿器科でしたが、その他の外科や婦人科にも適応が広がりました。特に骨盤内など狭い術野の手術には有利です。当院は2014年、神奈川県で4番目の早い時期にダビンチを導入しています。

田医師：大腸がんに対する直腸切除のロボット支援手術は2018年に保険収載され、当院でも同じ年に開始しています。2022年に結腸がんのロボット支援手術も保険適用になりました。

ダビンチは器具の操作性がよく、直腸・ 結腸の手術に有利

田医師：消化器の領域では、主に直腸がんと結腸がんの手術でダビンチが使われています。手術支援ロボットは狭い部位の手技に適しており、例えば、女性より骨盤が狭い男性で肥満体型の方などに有利です。基本的に消化器外科の手技として、ロボット支援手術は腹腔鏡の手術と大きな違いはありません。術野の展開の方法が違うだけで開腹手術と同じように病巣の腸をある程度の長さで切り、周囲のリンパ節を郭清して腸をつなぎます。以前、直腸の手術は腹腔鏡で行っていましたが、腹腔鏡の機材はまっすぐにしか入りません。ダビンチは器具の先が曲がるので、直腸に対してアプローチしやすい点が長所です。お腹の中から肛門側の腸を切りやすくなって縫合の方法が変わり、術後の肛門の機能が改善しました。残さなくてはいけない神経などの組織がよく見えるので操作しやすく、合併症が減ったと感じます。

泌尿器科では前立腺がん手術や 腎部分切除、女性の仙骨固定術を扱う

村上医師：ダビンチを使う泌尿器科の症例で1番多いのは、前立腺がんです。基本的に開腹手術や腹腔鏡手術と同じ処置をしますが、ダビンチのメリットが活かれます。前立腺は膀胱の出口にあり、尿道が中に走っています。前立腺の手術の際は、膀胱と尿道を離してからつなぎます。前立腺は骨盤の奥深くにあり、開腹手術では出血量が多くなるケースがありました。ダビンチを使うと視野を拡大し、鉗子を自由に動かせるので出血が少なくなります。ロボット支援だけではなく他の工夫の効果もありますが、前立腺の手術後におきる腹圧性尿失禁の回復も早くなっています。

前立腺がんの手術の次に多いのが腎臓の部分切除です。腎部分切除は2016年に保険適用になりました。開腹手術や腹腔鏡手術では腎臓を全部取るしかないケースでも、ダビンチの導入で腫瘍の部分だけ切除しやすくなりました。腎臓は血流が豊富な組織で、そのまま切ると出血するため、血流を遮断して腫瘍を切除します。止血には縫合が必要ですが、ダビンチで血管を拡大して見ながら鉗子の細かい操作ができ、時間も短縮できるようになりました。

女性の骨盤臓器脱に対する仙骨固定術にもダビンチを使っています。骨盤臓器脱は骨盤の中で膀胱や子宮が下がり、膣の壁を押して体外に出てしまう疾患です。仙骨固定術は、メッシュの網を使って子宮や膣壁を仙骨の前の靱帯に引っ張り上げて止める手術です。腹腔鏡による仙骨固定術は2014年の4月に保険収載され、私たちは7月から始めました。ロボット支援下での仙骨固定術は2020年に保険適用になっています。ダビンチを使う手術では、お腹からメッシュを膣壁や子宮に20針ほど縫合するのに器具を動かしやすく、傷も小さくできます。婦人科での手術やロボットを使わずに手術する方法もありますが、当院では泌尿器科でダビンチを用いて多くの症例を手掛けています。



横浜市立みなと赤十字病院は、手術支援ロボット「ダビンチ」を使った治療に約10年の実績があります。開腹や内視鏡と同様、ダビンチを手術の選択肢の1つとして臨床に活かしてきました。泌尿器科では前立腺がんや腎部分切除、女性の骨盤臓器脱に対する仙骨固定術、外科では直腸と結腸のがんの手術などにダビンチを使用しています。同院は方法によらず手術までの待機を短く、スムーズな院内連携で合併症のある患者さんにもよりよい治療を行う方針です。これまでの経験からどのようにダビンチを捉え、活用しているか伺いました。



インタビュー全文を
WEBで公開中